

論文の内容の要旨

論文題目 80年代女性作家における身体の諸問題
- 吉本ばなな・松浦理英子・小川洋子の小説をめぐって -

氏 名 ジェヴァイニ・アレクサンドロ・ジョヴァンニ

1980年代において、日本の出版界に数多くの若い世代の女性が登場し、大きな人気を得た。数年間で姿を消すことなく、そういった20代の女性作家たちが着実に執筆し続けながら、海外でも訳され、場合によっては、日本文学を代表するまでとなった。

吉本ばなな、松浦理英子、小川洋子を始めとする作家たちが、世界に通用するような普遍性を通して多くの読者に自分たちの声を届けるようになり、日本の若い世代の感覚を語ってきた。

彼女たちの作品には、いわゆるサブカルチャーが生み出した登場人物を通して筋が織り込まれている。主人公たちが主に若い少女であり、「言葉」より「身体」で外界とコミュニケーションを取ろうとしているところが多くみられる。

小説という伝統的な体裁を借りて、それまで文学と関係のなかった、「少女的な」文化人類学資料や言葉が取り入れられている彼女たちの作品は、結果として画期的、しかも独創的なものになっているが、作者たちが目指していたのは必ずしもオリジナリティーではなく、自分たちが知らず知らずのうちに身につけていた文化へのシミュラクルだったと思われる。

物語の筋が織り込まれていくに連れて、登場人物の出来事は勿論だが、一つの興味

深い身体像も描かれてくる。

時代と合致するその新しい身体像には社会の体制が反映しており、その「病理」までが剔抉されている。

そして、そのような病理から自身を守るために、若い女性作家たちは辛い現実から逃避することを試みる。但し、昭和 30 年生まれの世代から、イデオロギー無用気候が広がっていたため、自分たちの、社会に対する不信を怒りや闘争心を通して表現することができなかった。

それでも、社会と戦いたければ、その前提となっている基礎を一つ一つ破壊するより他ならなかった。結婚も出産もせずに、つまり「家族」を築かないことで、明るく戦うしかなかった。これは、80 年代に数多く登場した女性作家たち独特の、社会に対する「肯定的な批評」であった。

そこで、批評の武器として用いられたのは「身体」であった。それは、次々と様々な隠喩を生み出してくる、表象としての身体だった。

この論文の中で、吉本ばなな著『キッチン』、松浦理英子著『ナチュラル・ウーマン』、そして小川洋子著『シュガータイム』を初めて横に並べることが試みられた。これらの 3 作は、作風が必ずしも類似しているとは限らないが、時代背景が共通していることは明らかである。

そこで、同じ基盤の上に立っているこれらの 3 作の中で、身体の可能性、あるいは不能にまつわる表現の選択は著者によってどのように果たされたかを、この論文に互って探ってみた。

第一章では、吉本ばななが描く少女の「台所的」な空間について述べた。『キッチン』の社会体制に対する「肯定的な批評」は、まず「死」をもって、家族という制度を消すところから始まる。そして血縁ではなく、食の共有を通して幻の家庭が創り直されている。吉本が提案する家族像の中で孤児の少女たちは、食する身体に導かれながら、近親同士の絆を築こうとするのである。

第二章では松浦理英子の大胆な挑戦を分析してみた。家族を黙殺し、自らのフィクションからその姿を抹消した後、少女たちしかいない空間を創り出すのである。松浦の小説に登場する〈ナチュラル・ウーマン〉たちは多様性に満ちた性をもって恋愛関係を結ぼうとする。但し、より自然に振舞うため、異性、つまり男性を物語から完全に排除している。松浦の「戦い」は社会の一つの基本だと見なされている、生殖を前提とする

異性愛の概念を破ることである。そこで、同性愛を選んだ少女たちは自らの性的身体に従いながら、他者との接触に挑んでいる。

第三章では、小川洋子著『シュガータイム』の一つの「読み」を提案してみた。小川の「肯定的な批評」は、家族という制度の中に身を置きながらも、その内側からそれを壊そうとすることだ。彼女の使う武器とは、異常性として現われてくる複数の「病」である。しかし、小川の描く病は身体を脅かすが、「死」に至らないで次第に身体を消滅させてしまうものだ。そして最終的に身体と共になくなるのは、言葉である。困って、人物たちに残されるのは沈黙に陥った精神だけである。小川の小説においては一貫して、人間のコミュニケーションの欲望が無言という否定を通して表現されているのである。

現実社会と分離するために、吉本、松浦、小川は共通して、自由に生きることが許されていた「甘い世界」に遡ることを試みた。これは青春期、つまり少女であった時期へ回帰する過程の始まりである。

しかし、皮肉なことに、彼女たちの挑戦を通じて得られる快楽は、一時的なものに過ぎないことが次第に発覚してくる。

なぜならば、「甘い世界」の中に長くいればいるほど、様々な「不能」が現われてくるからである。最初は全身で愉しんでいた性も食も、快楽どころか、苦痛の原因になり、やがて身体のすべての機能に悪影響を与えてしまう。その結果、身体は自閉し、コミュニケーション全体の不能に陥り、又しても孤児となった少女たちは孤独感を覚える結果となる。

吉本、松浦、そして小川が提案したのは、一つのパラドックスである。現実を逃避するために作り始めた幻想的な次元は、実は社会が理想としていた世界でしかなかった。従って、袋小路に行き詰まった彼女たちに残された唯一の可能性は、現実に戻ってから身体と共に精神も「大人」として成長させるか、永遠に不能を抱えながらも「少女」として存在し続けるか、のどちらかである。

最後に、作品を「読む」以外の、この論文のもう一つの目標として、多数にある異質の評論や記事を整理することにした。従って、「書誌」には、著者別の詳細な著作リスト、そして3人に関連する参考文献を、それぞれが属する分類に分けながら、載せておいた。